

I 発掘調査に至る経緯

大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置し、畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40年代のいわゆる地域開発ブームの渦中に、本町もさらされ、武蔵野の雑木林が研究所に、畑地が宅地へと化していった。

町が基本構想の理念としている“ひとりひとりの人間を大切にするまちづくり”を、まちづくりの基本とし、だれもが住んでよかったといえる誇りあるふるさとづくりを成し遂げていく上で、町のもっている歴史的・伝統的基盤を正しく継承していくことは必要であり、不可欠のものである。町づくりは、地域の歴史を十分に学び、それを更に発展、推進していくことが望まれているが、この点にも、埋蔵文化財の発掘調査・保存・活用が、大いに貢献していくことも必要であろう。

現在、大井町に40ヶ所ちかくの埋蔵文化財包蔵地が確認されているが、これらは、すでに人々から忘れられ眠っているが、これらの遺跡は地域の愁久な歴史を語る私たちの財産であり、学校教育の大切な教材として、また、身近の歴史として、地域の発展過程をうつし出してくれている。

本町では、埋蔵文化財保護の観点から、中小の開発行為に対処するために、昭和53年度から、第一次5ヶ年計画で、国庫及び県費補助による事業とし、遺跡の発掘調査を実施してきた。東部遺跡群の今年度の発掘調査の実施した遺跡名、所在地、原因者、面積、調査期間は下表のとおりである。

今回の5ヶ所の調査の原因は宅地建設2件、農地の天地返し3件で、調査総面積2,383㎡である。

埋蔵文化財包蔵地における本町のような蚕食的開発状況は、憂慮すべき事態にあり、遺跡を総合的に把握することや遺跡そのものの価値が失われる危機にある。しかしながら、小面積の記録保存の調査の成果を十分に活用し蓄積させていく努力も同時に不可欠である。新興住宅地として変貌した大井町に住む住民が大井がふるさとであるためには、豊かな自然環境の保存と共に歴史的環境の保存、それは、大井町の歴史を形成してきた各種の埋蔵文化財の保存と活用を、これからの都市計画(町づくり)に位置づけていくことが求められてくるであろう。

No.	遺 跡 名	所 在 地	原 因 者	面 積	調 査 期 間
1	苗間東久保遺跡 第 7 地 点	大井町苗間字東久保 573-3	長 澤 徹 郎	396㎡	4月1日～4月3日
2	西ノ原遺跡 第 9 地 点	〃 苗間字西ノ原 93-1 98-1	堀 井 照 夫	600㎡	6月1日～6月23日
3	西ノ原遺跡 第 10 地 点	〃 苗間字西ノ原 180-2	安 野 祐 司	400㎡	11月4日～11月13日
4	東久保南遺跡 第 1 地 点	〃 亀久保字東久保 547	堀 井 弥 作	320㎡	11月24日～12月14日
5	東 台 遺 跡 第 2 地 点	〃 大井字東台 640-7	内 田 友 次	667㎡	12月14日～2月13日

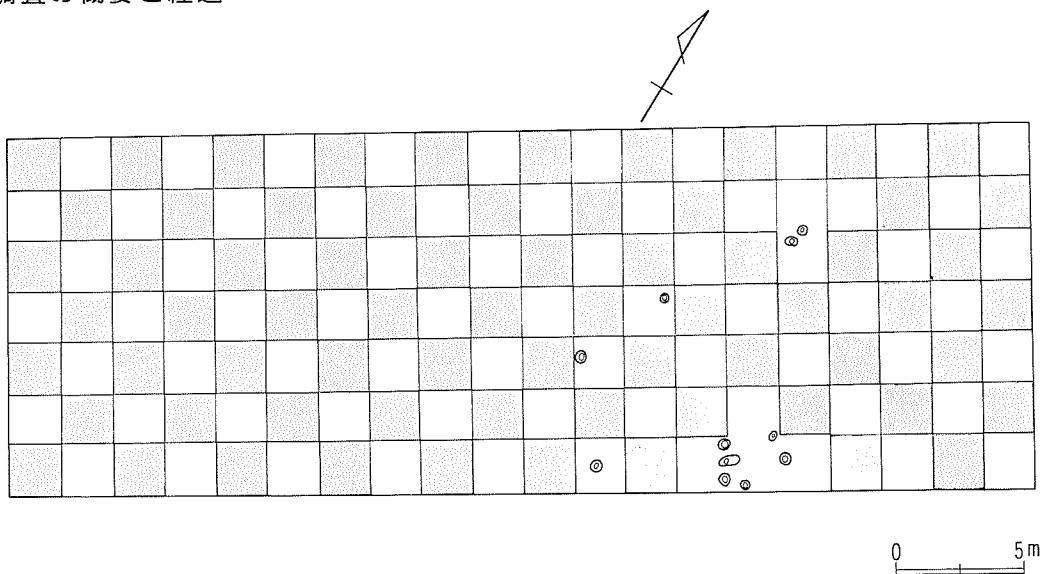
V 西ノ原遺跡第10地点

V 西ノ原遺跡第10地点

遺跡の地形と調査区

8ページの第4図を参照。

調査の概要と経過



第11図 遺構分布図 ($\frac{1}{300}$)

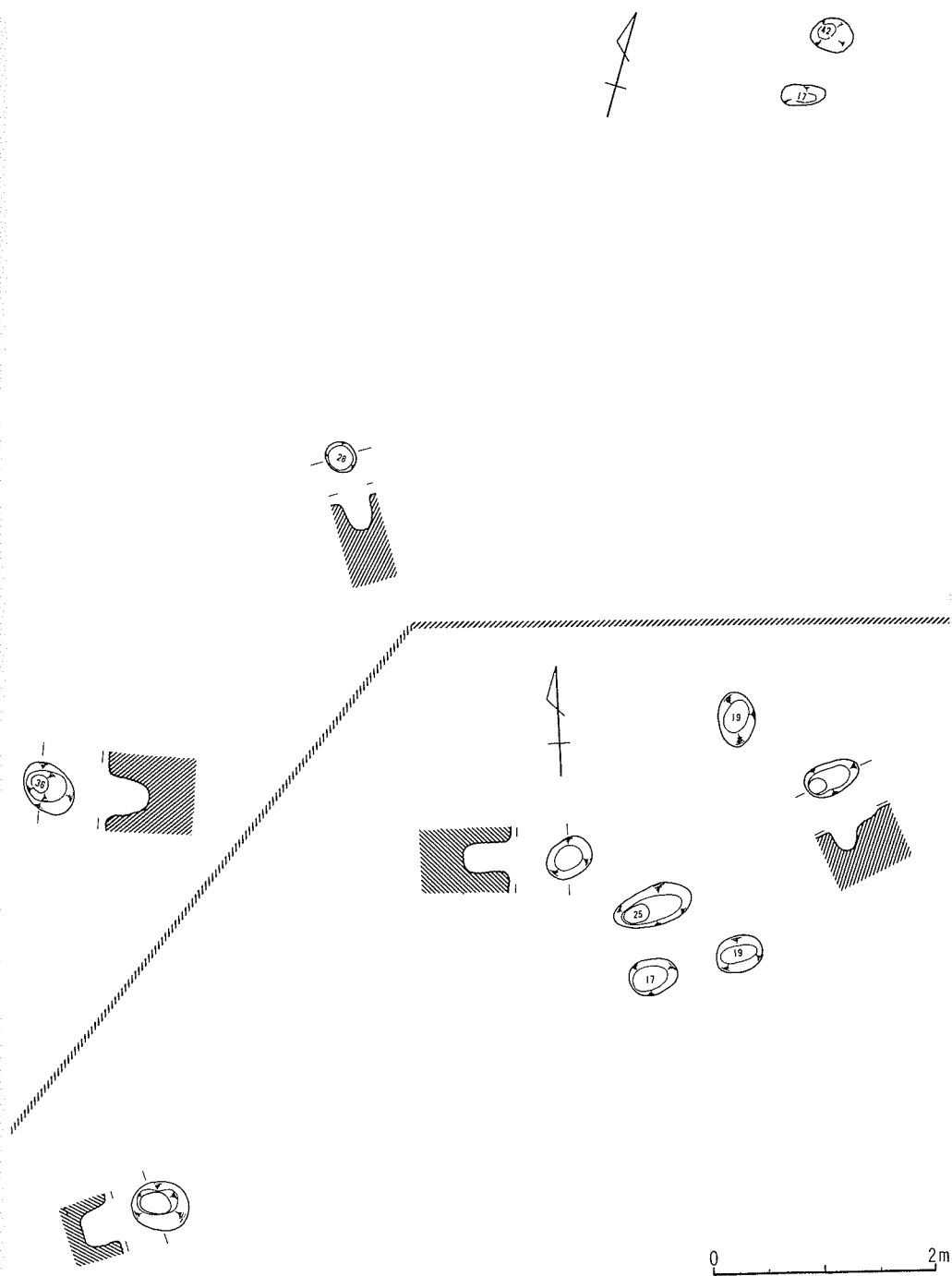
第10地点は、西ノ原遺跡の最東端に位置すると思われる、遺跡の範囲確認上たいせつな調査となった。昨年度の第6地点は、本調査区よりも若干北西寄りではあったが、堀之内Ⅱ式の深鉢をとまなう土壌や柱穴が確認されている。本調査区は標高19.5mで、調査前に実施した表面採集では、東側にいくらか表面の磨耗した縄文土器片が採集できた程度であった。

調査は2×2mのグリッドを設定し、市松模様に掘り進んでいった。調査区の中央部で柱穴11本を確認した。良好な柱穴は少なく、当初植えられていたイチョウの伐根による攪乱で荒らされていた。

遺構・遺物（第12図）

確認された遺構は第12図の柱穴だけである。また柱穴内からの遺物はまったくなかった。調査途中、耕作土中より黒曜石製チップの小破片が1点出土のみであった。

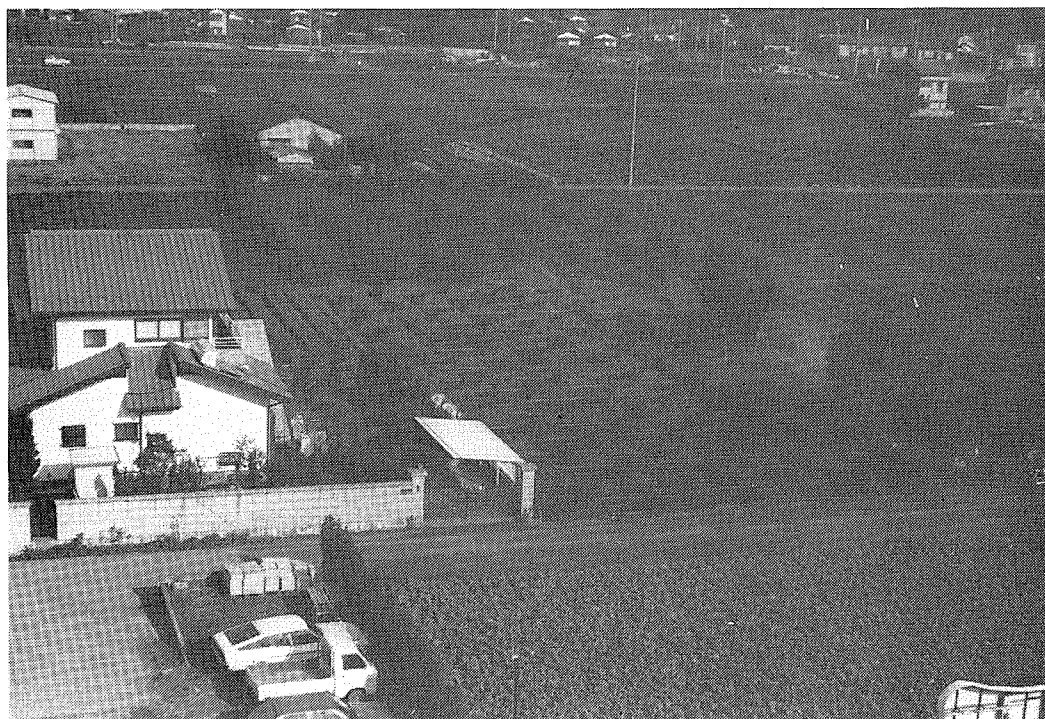
V 西ノ原遺跡第10地点

第12図 柱 穴 群 ($\frac{1}{60}$)

図版 9 西ノ原遺跡第10地点

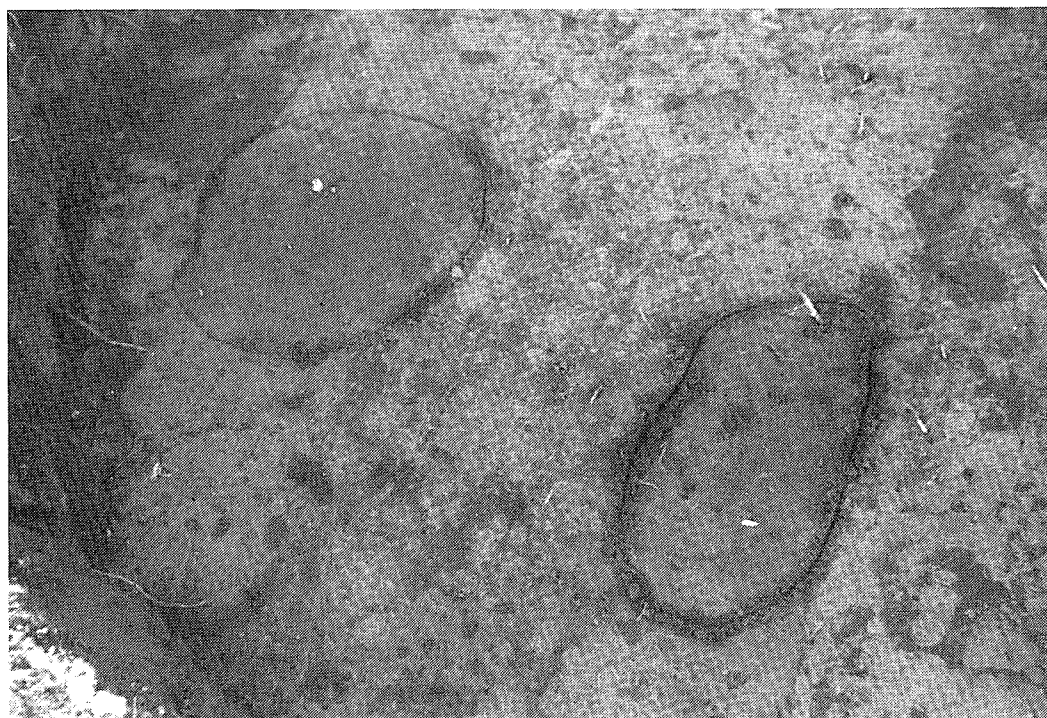


1. 発掘風景

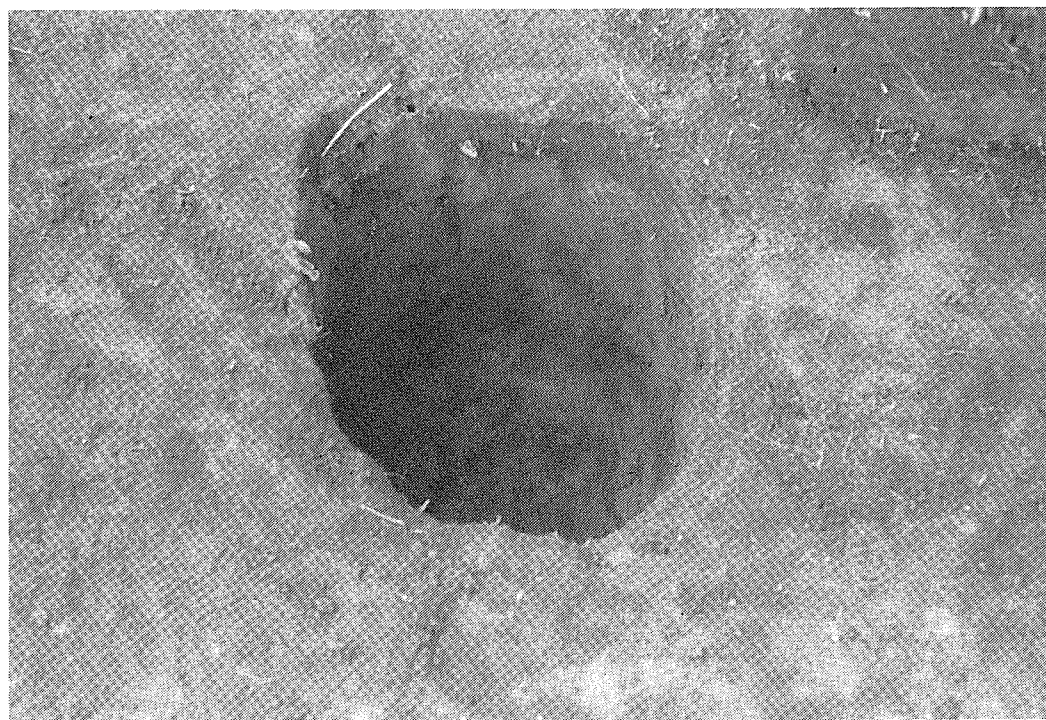


2. グリッド完掘状況

図版 10 西ノ原遺跡第 10 地点



1. 柱穴プラン



2. 柱 穴